

自ら学び，確かな学力を身に付けるための少人数指導のあり方
～岐阜県・基礎学力定着サポートプランの課題に向けて～
(美濃市立美濃小学校での実践より)

～もくじ～

1.	研究の主旨	1
2.	研究内容・実践	3
	(1) 少人数指導の概要	
	(2) 学習状況に応じた指導過程や教材の工夫	
	(3) 個々の習得や定着の状況を踏まえた授業と家庭学習のあり方	
	(4) 個々のつまずきに応じた指導の充実	
3.	研究実践の成果	13

1 研究の主旨

「岐阜県教育ビジョン（平成20年12月策定）」では、重点目標に「確かな学力の育成」を掲げ、その取り組みの基本方針を示している。学校では子どもたちの学ぶ意欲を高め、基礎学力を確実に身に付けることを重要視している。しかし、現状は子どもたちを取りまく環境が大きく変化し、核家族化、少子化、共働きが多くなるなどの家庭環境の変化に伴い、子どもたちが学習する環境に大きな変化をもたらしている。また、幼少期から塾・習い事などにより、個々の学力差はとても大きい。

算数の学習においては、学年が進むごとにつまずきが多くなり、なかなか授業についていけないなどの問題が多く生じている。数に対する概念、分数、割合などの理解、基礎的な知識や技能などが未定着な子どもたちは少なくない。基礎的な知識や技能が未定着なため、学習に生ずるつまずきを克服することができず、学習意欲を低下させ、授業についていけない子どもたちを生み出している。こうした状況に陥らないためにも、個々のつまずきにできる限りは早く対応し、早い段階で支援することが重要になる。

「平成20年度全国学力・学習状況調査追加分析（その2）」では、習熟度別少人数指導の低学力層に対する学習意欲や学力への効果について、次のことを明らかにした。

-
- ① 算数・数学において習熟の遅いグループに対する少人数指導を行うことにより、低学力層の児童生徒の学習に対する関心・意欲・態度が高まる傾向があることが確かめられた。
 - ② 習熟度別少人数指導を受けた児童生徒の方が、受けなかった児童生徒よりも正答率が高い問題が多い。
 - ③ 習熟度別少人数指導を受けた児童生徒の方が、受けなかった児童生徒よりも無解答率が低い（＝解答意欲が高い）。

こうしたことから、習熟度別少人数指導を推進することは、子どもたちの理解や習熟の程度、興味・関心などに応じたきめ細かな指導の充実を図り、確かな学力を育成することにつながる。

「基礎学力定着サポートプラン（平成23年2月岐阜県教育委員会）」では、基礎的・

基本的な知識・技能の習得や定着が不十分になる原因として、次のようなことを挙げている。

まずは一斉授業において、子どもたちの学力の多様な状況に十分対応できていないことが多くある。授業では、題材提示から課題化、追究、課題解決したことを共有化、そして、本時の学習のまとめとなるが、これまでの学習におけるつまずきが多くあり、課題の意味が理解できていなかったり、課題に対する自分の考えをまとめることが困難だったりする。個々のつまずきをできる限り具体的に明らかにして、つまずきに応じた指導を充実させることが重要である。

また、別の原因として、言語活動の充実といわれる昨今、子ども同士の意見交流等に必要以上に時間を費やし、練習問題を解く時間や学習したことを使い自分で解いてみる時間、学習のまとめをする時間が十分確保されていないことも大きな原因として挙げられている。授業における学習活動を精選し、子どもたちが自ら学習できる授業展開を検討する必要がある。

次に、少人数指導においては、どのグループにおいても、同様の指導法の下で、同一の教材が使用されて展開され、せっかく少人数のグループに分けているにもかかわらず、基礎的・基本的な知識・技能の習得や定着が不十分な子どもたちに対して、ふさわしい指導過程や教材の工夫、きめ細かな指導・援助が十分でないという課題が挙げられている。個々の習得や定着の程度に応じたきめ細かな指導を施し、授業がわかる楽しさやできる喜びを感じさせながら、知識・技能をしっかりと習得・定着させる学習指導を展開しなければならない。

さらには、繰り返し学習する機会（家庭学習）においては、一律に計算ドリルを宿題としていることに大きな課題があると指摘している。計算ドリルは、十分理解できている子どもたちについては、自分の力で取り組むことができ、知識・技能の定着を図ることができるが、授業が理解できていない子どもたちや、自分の力で解けないままの子どもたちにとっては、宿題を出されても十分取り組めない状況にある。繰り返し学習する機会についても、個々の学習状況を十分に把握し、その状況に応じた指導を施すことが必要である。

このような状況を十分踏まえ、子どもたちが「自ら学び、確かな学力を身に付けるための少人数指導のあり方」を検討した。

2. 研究内容・実践

(1) 少人数指導の概要

① 少人数指導のねらい

やればできることやわかる喜びを味わわせ、学習は楽しいという体験を通して、子どもたち一人一人に学習意欲を持たせる。

～少人数指導によって、個々に合わせた学習が充実する～

そのためには、子どもたちに学習のつまずきを見つけさせ、必要なときに支援ができる学習活動をつくる。

～習熟度別指導によって、個々に応じた学習に対する支援ができる～

② コース選択

1学級を2つのコース（じっくりコース，しっかりコース）に分けて，それぞれコースにあった学習指導を行う。特に，つまずきの多いじっくりコースへの指導を充実させる。

じっくりコース ～学習すべき内容をゆっくりと丁寧に学習する。既習事項を忘れていた場合は，その都度復習をしながら一人一人の学習状況に応じて指導する。（少人数指導担当，学習室，10名程度）

※ただし，通常授業の補充として，家庭での学習，夏休みの算数教室などを位置づけ，おおむね学習内容が理解できるようにする。

しっかりコース ～学習すべき内容を効率よく学習する。繰り返し練習や文章問題など，学習内容がよりよく理解できるように指導する。（学級担任，教室）

③ 少人数指導実施にあたって

<じっくりコースへの指導のポイント>

i) 問題，課題，課題追究，まとめと，実態に応じて学習内容を厳選する。

- ・問題，課題は，教科書の「問題」の意図を十分検討した上で，児童の実態に応じて検討する。
- ・課題追究は，本時身に付けたい力を明確にした上で，必要に応じた学習の質・量を検討し指導する。
- ・まとめは，児童の実態に応じて，わかりやすい言葉・式・図で指導する。

ii) 児童の実態を把握し、つまずきに応じた指導の手立てを明確にする。

- ・児童の実態を明らかにする学習カルテ（単元を理解するための前単元の理解度）を作成する。
- ・つまずく場面で、具体的な指導の手立てを考え、補助プリント、筆算ノートなどを検討する。

(2) 学習状況に応じた指導過程や教材の工夫

個々の習得や定着の程度に応じたきめ細かな指導を施すことは、少人数指導のみならず、すべての学習指導で重要なことである。さらにそれが、少人数指導であればこそなおさら、効果的に施すことができる。授業の学習活動において、**ねらい**、**問題**、**課題**、**課題追究**、**まとめ**と、子どもたちの学習状況を踏まえ検討し、実践した。

<授業実践> ～5年大日本図書指導書 p105参照

「19. 分数と整数のかけ算・わり算を考えよう」 第2時

<通常の授業では>

ねらい：分数×整数で、途中で約分する方法や仮分数×整数、帯分数×整数の計算の方法を理解し、計算できる。

問題：② 仮分数×整数，③ 帯分数×整数

課題：求め方を考えよう！

課題追究：②は、計算の最後に約分をする方法、計算途中で約分する方法など、いろいろな求め方を考え、途中で約分する方がよいことを理解する。

③は、帯分数を仮分数に直して求める方法と、帯分数のまま計算する方法を理解する。

まとめ：分数のかけ算では、途中約分したり、帯分数は仮分数に直したりして計算する。⇔ 2，3の問題に取り組む

～じっくりコースの授業～

ねらい：分数×整数で、途中で約分する方法を理解し、計算することができる。

⇒分数のかけ算では、約分することがとても重要になる。本時の学習は、

約分をすること、帯分数のかけ算の学習であるが、約分の理解でつまずくことが予想されるので、約分の理解も含めて学習することを大切に
にする。

問題：② 仮分数×整数

課題：求め方を考えよう！

課題追究：②は、計算途中で約分する方法を理解する。そのとき、約分をすること
のつまずきが予想されるので、約分について理解することが重要で
ある。その場合、約分の計算の方法だけではなく、 $\frac{2}{3}=\frac{4}{6}=\frac{6}{9}$ …などの
理解を、イメージ図などを用いてしっかりと理解することが重要であ
る。

まとめ：分数のかけ算では、約分できるものは途中約分して計算する。⇔②の問
題に取り組む。

このように本時は、分数×整数の計算で約分をすること、帯分数×整数の計算方
法を学習するが、約分という意味、その方法、帯分数の意味、帯分数を仮分数にする
方法など、多くのつまずきが予想される。こうした中で本時は、分数のかけ算にお
いて約分することに着目し、約分の意味などの学び直しをするなど、つまずきに
応じた指導を行った。こうした学習状況に応じた指導過程や教材を検討することは、
子どもたちの学習において極めて重要である。

(3) 個々の習得や定着の状況を踏まえた授業と家庭学習のあり方

一斉授業において、子どもたちの多様な学習状況に十分対応できていないことは、
指導上大きな課題であり、授業づくりをする上で、よりきめ細かな指導が求められ
る。個々の習得や定着も状況を踏まえた授業づくりを検討した。

<授業づくり>

宿題の確認 ～前時の宿題を確認する。(前時の学習で自分の力で必ずできる問題)

前時の学習 ～前時の学習の復習をする。

問題 ～本時の問題を提示する。

課題 ～問題から課題を生み出す。

課題追究 ～自分の考えを持たせ、仲間と考え方を共有する。

まとめ ～本時わかったことをまとめる。

練習問題 ～わかったことを使って問題に取り組む。

振り返りシート ～評価問題に取り組む。(授業の振り返りと今日の学習で必ずできる問題)

今日の宿題 ～問題を自分で取り組む。

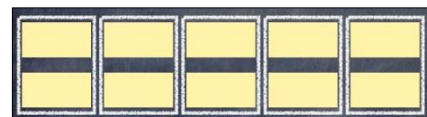
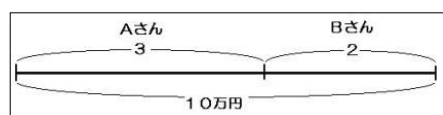
まずは、前時の**宿題の確認**を授業前に位置付けた。前時の学習について自分で取り組み、学習した内容を復習することは、つまずきをできる限り少なくすることにおいてとても重要なことである。また、授業以外で、自分だけの力で問題を解くことは、「自ら学び」という視点で極めて重要である。その見届けを大切にしなければならない。

前時の学習は、つまずきの多いじっくりコースでは、今日の問題の前に位置付けた。つまずきの多い子どもたちは、本時の学習において、必要な知識や考え方が不十分であることが多い。本時の学習に入る前 (**前時の学習**) に、予想されるつまずきに必要と思われる知識や考え方の復習を位置付けた。

問題提示では、ICT 活用 (視覚的支援) によって、題材に興味関心をもたせ、意欲を促している。特に、問題のイメージ化を図り、数量関係を明確に理解させるために活用した。

課題追究では、本時の学習内容において、教え込みにならないように子どもたちの言葉で、子どもたちの考えを大切にしながら学習を進めることを大切にした。特に、ノートに書くということを大切に指導する。また、個々のつまずきに応じた指導が、少人数指導において、この場面での指導が最も重要である。また、自分の考えを書くときに、イメージ化を図る補助プリントなどを用いて指導した。

(補助プリント)



毎時間の**練習問題**、**振り返りシート**、**今日の宿題**などで、今日の学習の定着を図る。本時の学習を確認する**練習問題**は、全体で学習内容を振り返り、確実に身に付けさせたい知識や技能を確認する上で重要である。その上で**振り返りシート** (評価問題) で

は、小テストのように、自分の力だけで問題が解けるかどうかを確認する。ただし、ノート、教科書をみながら問題を解いてもよいとした。子どもたち自身の力で取り組めるようにする。そして、本時の学習をさらに確かなものとする「今日の宿題」を位置付けた。「今日の宿題」は、1ケタのたし算、ひき算、かけ算の簡単な100問計算と、今日の学習にそった復習プリントをつくり、児童に課題として与えた。このような授業で学んだことを家庭で復習することは、とても重要なことといえる。

このように、学びのサイクルを定着させ、子どもたち自身が、意識をもって学習できるようにした。こうしたことから、授業においてつまづきをできる限り少なくし、学習がよりよく理解できるようにした。また、子どもたち自身が、自らそのつまづきを意識し、克服しようとする意欲が大切である。

子どもたちのノートづくり (5年じっくりコース)

①

9/5(木) ♡ 三角形の作図 ♡

＜課題＞
 三角形の作図の仕方を覚えよう！
 3つの辺の長さ
 8 cm、5 cm、7 cm

はみださず、交わった所にせんを2本ひく!!

8 cmをひき、左から順に5 cm、7 cmとひいていく!

辺BCをかく
 半径5 cmの円をかく ←おぼえる!
 半径7 cmの円をかく

2つの辺の長さ8 cm、5 cm、その間の角の大きさ60°
 この長さは、この長さは、
 ・にあわせて、
 ↓せんをひいて、
 ほしい!!

「角をしっかりとる」
 60°

②

宿題 ① 3つの辺の長さ 6 cm、7 cm、3 cm
 ② 2つの辺の長さ、その間の大きさを 6 cm、4 cm、60°

まず6 cmをひく。コンパスで、4 cmをはかて、円をかく。次でコンパスで、3 cmをかく。せんでむすぶとできあがり

60°をはかたら、しっかりとるしをつける!

まず、6 cmをひく。60°をはかると、その60°のしるしをつけたところに、4 cmのせんをひく。そしてBから、その4 cmのところまで、せんをひく。

③

④

⑤

＜まとめ＞
 コンパスでつかうのは、しっかりと交わうようにひく。ぶんどきのほうは、かくどをはかたら、しるしをつけ、そのしるしのところまで○ cmなどをひく。

～このノートからみえる算数の学び方～

- ① 問題、課題から個人追究、まとめと、学習の足跡が明確にしている。

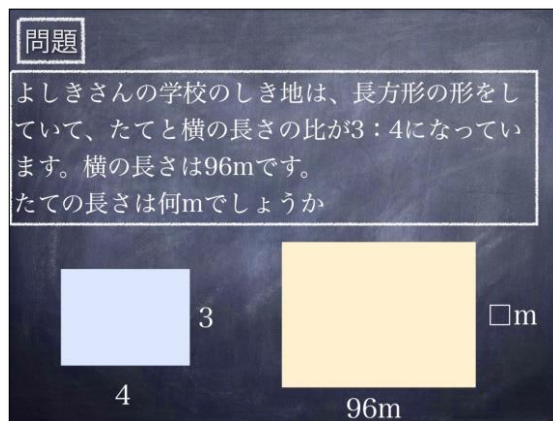
- ② 授業で、自分で考えたこと、仲間の考えや先生の説明など、作図するときの考え方を自分なりに明らかにしている。
- ③ まとめとして、自分の言葉で学んだことを明確にしている。
- ④ 授業と同時に、家庭での学習も作図の考え方を明確にしている。
- ⑤ そしてなによりも、こうした自分で自分の学習を高める力（自己指導能力）を大切にしている。

<視覚的支援を大切にした導入>

つまずきに応じた指導は大切ではあるが、つまずきをできる限り少なくする指導が重要である。まずは、授業の導入である。6年生では、じっくりコース、しっかりコースともに、ICTを活用して問題提示をしている。とりわけ算数というと、計算ができればよい、問題が解ければよいととらえがちであるが、それだけでは今後の数学につながる学習にはならない。分数のかけ算などでも、形式的処理により答えが出るだけでなく、数直線や面積図によって、数量のイメージ化を図ることはとても重要である。

～ICT活用により～

- i) 問題の内容を理解する。
- ii) 図や表などで数量関係を整理する。
- iii) 数量関係をつかみ、イメージ化を図る。
(数直線、面積図などの表象)
- iv) 解答を求めるための数式を立てる。



また、「速さ」の学習では、6年生のじっくりコースで次のような手立てを施した。速さの導入では、「ウサイン・ボルトといろいろな犬では、どちらが速いか。」を題材とした番組を見せた。単なる言葉、数字の問題ではなく、いかに「速さ」を実感することができるのかがねらいである。その番組では、ボルト（100m, 9秒58）とチワワ（100m, 17秒33）と断然ボルトの方が速いことから始まる。次に、ボルトと柴犬（100m, 10秒06）、かろうじてボルトの方が速いことを目で見えて実感した。そして、番組の展開は、犬の方が速いということへと構成されている。ボルトとウィペット（100m, 7秒53）、断然犬の方が速いということ、映像を見て実感した。単に「速さってどうやって求

めたらいいか。」という学習ではなく、子どもたちに興味関心を持たせ、「速さ」という概念を数感覚として位置付けることは、とても重要である。また、この導入で、同じ距離を短い時間で走ることができれば、速いということが数値としてわかるということである。そして次の段階は、「速さ」は、決められた時間の中でどれだけ進むことができるかで速さが数値化できる。しかし、日常的には同じ距離をどれだけ短い時間で進むかで速さを決めている。同じ時間でどれだけ進むのかは、なかなか日常的ではない。だからこそ、算数で学習する意義があり「速さ」という考え方をしっかり理解する必要がある。さらには、ビデオを見せながらボルトが速いことを教室の端から端までを走って、何秒かかるかで比べてみた。ある子は、端から端までおよそ7mで1秒、ボルトは、10mを1秒で走る、こんな話をしながら「速さ」という概念の学習をした。

「速さ」の学習にしても、どんな学習にしてもそうであるが、実感をともなった学習がとても重要だということである。「速さ＝道のり÷時間」と、このことさえわかっているならば問題は解ける、そう思いがちであるが、中学校での方程式の応用、距離と速さと時間の問題はなかなかできない。速さの求め方で、よく「は・じ・き」という言葉を小学校で学ぶと聞くが、形式的な処理の方法ばかりで、本質的な概念の理解にはなっていない。小学校算数で大切にしなければならないことは、実感を伴った理解がとても重要だということである。こうしたことから、つまずきをできる限り少なくする導入は重要である。また、ICT活用はそのための有効な手段となる。

～ICT活用の利点～

- ① ICT活用によって、いろいろな学習活動への手間が省け、子どもの学習活動の指導、支援が充実できる。例えば、問題提示が瞬時に提示でき、今日の問題を読んだり、書いたり、または、問題の拡大コピーを貼るなどの手間がなくなる。その分、問題をていねいに読み、問題把握、課題化への助言など、効率のよい導入が可能となる。
- ② ICT活用によって、題材のイメージ化を図り、学習内容に応じた視覚的支援が可能になる。算数の授業では、具体的な問題から数量関係、図形等を読み取り、半具体物、線分図、数直線などイメージ化を図ることがとても重要である。数量関係、図形等がどのように、子どもたちの中で構成されるか、極めて重要である。ICT

活用は、イメージ化が瞬時に行え、有効な視覚的支援となる。

- ③ ICT活用によって、数学的な考え方が共有でき、本時のねらいを達成することができる。数学的な考え方を共有する学習活動は、とても重要である。グループ交流による班交流、全体交流など、発表ボードに書く、黒板に書くなどの活動によって共有することができるが、ノートに書かれた個々の考え（本時のねらいにかかわる）を共有することが難しい。ICT活用は、そうした考えを適切に提示し、全体で共有することが可能となる。個々のノートを、ICT活用によって提示するなどである。

<個々の習得や定着状況を踏まえた家庭学習>

家庭学習（繰り返し学習する機会）の課題は、基礎学力定着サポートプランでも指摘している。確かに、授業がなかなかわからない子どもに、いくら計算ドリルの宿題を出してもできるようにはならない。かえって、学習意欲を損なわせるだけである。宿題によって、何をどのように定着させるのか考え、どのような家庭学習を位置付けるかが重要である。昨年度は、ドリルの学習と合わせて、「ノートまとめ」として、今日の復習をするように子どもたちに投げかけをし、授業内容を理解させるための宿題を出した。「今日の学習を振り返り、もう一度ノートにまとめ直す。」という課題である。今年度は、ノートまとめ（今日の復習）と合わせて、じっくりコースの子どもたちには、授業にそった内容のプリントと計算トレーニング（単純な100問計算）の宿題を出している。確かに計算ドリルによって、毎日の家庭学習を定着させること、基本的な内容をしっかりと理解させることは重要であるが、すべての子どもたちにとって、個々の習得や定着の程度に応じた学習とはならない。毎日の家庭学習も、個々に応じた指導が大切になる。毎日勉強すればだれでもできるようになる、そういうわけではない。わかるようにする、できるようにするには、必ず適切な指導を施すことが重要である。こうした意味で、もう一度宿題の意味を考えることが重要である。

(4) 個々のつまずきに応じた指導の充実

基礎学力向上の一つの事業として、少人数指導がある。少人数指導の目的は、算数科のつまずきに応じた指導を明確にし、基礎的・基本的内容を確実に身に付けさせる

ことである。いろいろな学校で取り組まれているが、一定の成果はあるもののなかなか難しいのが現状である。「つまずき」とは、辞典によれば「あやまち、まちがい」という意味になっている。しかし、算数でのつまずきは、「まちがい」というより、「今まで学んだことが理解できていない。」「そのために本時の学習でつまずいてしまう。」ということがほとんどである。6年生の「比例」の授業で、比例の性質を利用して立式はできていても、わり算ができないので正しい答えが導き出せないことがある。単なる計算ミスではなく、わり算がしっかり理解できていない。また別の子は、立式のときに比の意味が理解できていないこともある。わり算ができない、比の意味が理解できない、九九ができない、面積を求める前に平行四辺形がかけないなど、子どもたちのつまずきは様々である。そのすべてに対応する授業を展開することは、ほぼ不可能である。つまずきに応じた指導は、すなわち個に応じた指導をいかに充実させるかである。本校では、こうしたことから授業のはじめには、必ず前時の学習（復習）を位置付けている。前時の学習内容がわからないで、本時の内容は理解できない。個人追究では、できる限り個々の習得や定着の状況を把握し、そのつまずきへの支援を大切にしている。練習問題では、全体で答え合わせを終えるのではなく、個々の解答を机間指導で確認し、正答には○を付け、誤りのある子どもへはきめ細かな支援をしている。また、評価問題では、振り返りシートの問題に取り組ませ、一人一人の解答を確認している。そして、その授業内容にそった宿題を出し、次の授業前にできているかどうか一人一人確認している。こうした個に応じた指導を繰り返し、一人一人のつまずきをできる限り多く克服することが、基礎学力定着への一つの手だてとなる。まさに、少人数指導だからこそ、できる指導である。すべての子どもたちが、算数ができるようになることが重要であり、そのために努力することがとても重要である。

基礎学力定着、思考力・表現力の育成など、多くの言葉が叫ばれ、そのための手立てが多く実践されている。少人数指導も、そのための手立てとしてとても重要だとされている。しかし、算数の学習にどんなよさがあるのか、どんなところに算数を学ぶ面白さがあるのかなど、関心・意欲・態度をどう養っていくか、意欲を持たせるためにどんな手立てを施すのかは、あまり話題にならないのが残念である。学力とは、学んだことや学び取る力もあるが、学ぼうとする力も含んでいる。基礎的・基本的な知識・理解や処理、数学的な考え方を大切にすることはもちろん、学習に対する関心や意欲、態度を育てていくことこそが、確かな力には不可欠である。

<じゅくくりコース学習カルテ>

じゅくくりコース 学習カルテ		3小数のかけ算							意識調査(5月16日)						
番号	氏名	準備	コース	技	考	知	得点	ノート	1	2	3	4	5	6	7
5102		25	A	25	30	30	57	4	1	5	5	2	4	4	3
		算数の授業を楽しく取り組むことができる。算数は、わからないという思いが強い。かけ算においてはおおむねできるが、たし算、ひき算を含めた筆算は計算間違いが多い。基本的な計算能力への指導が大切である。													
5103		50	A	35	40	20	63	3	5	5	5	5	5	5	5
		算数の授業については、楽しく取り組むことができ、満足感が得られている。ただ日によって、情緒が不安定になり集中できないときがある。学習に向かわせる気持ちを大切にする。書くことへの指導が必要で、落ち着いてていねいに書かせる指導が必要である。内容はおおむね理解している。													
5107		10	A	10	25	0	23		5	5	5	5	5	5	5
		算数の授業には、ニコニコしながらよく取り組んでいる。ていねいな字が書けないなど、支援は大きく必要である。ていねいな指導で、おおむね小数のかけ算も時間をかければできるが、テストでは集中できずできなかった。ノートに書くなどの指導がまず必要である。													

じゅくくりコースの子どもたちについては、個々のつまずきをできる限り把握し、そのつまずきに応じた手だてを検討することが重要である。単元毎に、準備テストの結果、単元テスト、ノート評価、意識調査結果と、授業での取り組み状況などで、個々の学習状況、指導の方向を学習所見によって明確にする。学習所見は、学習内容、学習姿勢の現状、今後の指導の重点を明確にする。

～学習に関する所見～

- ・授業に対する意欲・態度

授業には意欲的に取り組んでいるか、集中して考えることができるか、学習に必要な持ち物はあるか、書くことなど学習で必要なことが確実にできるか。

- ・算数における理解、技能、考え方

算数におけるつまずきは何か、基本的な計算、今までの学習内容は理解できているか。

～意識調査～

意識調査は、7項目（1算数は好きか、2算数は役立つか、3授業は楽しいか、4授業はわかるか、5ノートづくりは大切か、6挙手は大切か、7毎日の学習は大切か）について、5段階（5そう思う、4思う、3どちらでもない、2あまり思わない、1思わない）で単元毎に調査をし、意識の変容を把握し、授業の改善を図るためのものである。

～ノート評価～

ノート評価は、単元ごとの子どもの学習を見届け、学習状況について把握する。また、ノートは単元毎評価（5段階）し、授業への取り組みに生かす。このことによって、できる限り子どもたちの学習状況を詳細に把握し、一人一人への指導の強化を図る。

3. 研究実践の成果

佐伯胖 1990「考えることの教育」のはしがきの一部である。

子どもというものは本来、きのうよりは今日、今日よりは明日と、日日進歩していくはずであろう。ところが、今日の教育の現状をながめると、子どもたちが年を経るにつれて、何か大切なものを失い、生気を失って進歩にいくとさえ思えてならない。

子どもの頃はあんなに楽しげに、あれほどまで無心に、何でもないことにも感動し、つまらないと思えることにも熱中し、何事にも興味や関心を示し、何でもまず自分でやってみようとし、同じことを何度でもくりかえしながら、毎回笑いころげ、何がそんなに楽しいのと聞いてみたくなるほどであった。ところが小学校に入り、中学校を経て高等学校へと進むにつれて大部分の子どもは、ものごとを考えることが、いかにもつらそうになる。「面白そうだけど、当面は関係ないよ」という。関係のないことを考えるのは損であり、ムダであるとみなす。子どもたちの中からどんどん失われていくもの、それは知ることのよろこびであり、考えることの楽しみではなからうか。

基礎学力定着サポートプランは、すべての子どもたちが確かな学力を身に付けるためのものである。こうした取り組みの課題に真摯に向き合い、子どもたちにできることへの取り組みは今後も大切にしなければならない。基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせるには、個々の習得や定着の状況を的確に把握し、それに応じた指導を充実させるがとても大切である。しかし、確かな学力とは、そのことだけで十分であるとはいえない。今後の生活、学習に生かしていけるような思考力・表現力、自ら学び、進んで学習しよう、取り組んでいこうという興味・関心・意欲などを含めたものが確かな学力である。本稿は、基礎的・基本的な知識・技能の定着に焦点をあてて検討した。テストの点数をあげるためだったら、問題を解く手順を教え、多くの問題を解かせればある一定の成果は得られる。しかし、それでは本質的なことは、何も解決

できない。確かな学力とは何か、その向上のためにはどんな指導を施すのか今後も検討が必要である。

中学校数学と違い、小学校算数は、子どもたちにとって日常的で、興味深く、「やってみよう」と思う内容が多くある。おいしいカルピスをつくるにはどうやって混ぜればいいのか（比）、ボールをできる限り遠くへ飛ばすには、どう投げればよいか（角度）、どっちが速いのか（速さ）など、子どもたちが興味をもち、楽しく取り組める題材はいくらでもある。小学校算数でこそ、興味・関心・意欲を大切にしなければならない。朝から計算学習、毎日の計算ドリル、繰り返しのプリント学習、学習はやりきることなどといい、どんどんわかる喜び、学ぶ楽しさを失っていくように思えて仕方がない。私たち教師も同じように、子どもたちとともにわかる喜びや教える楽しさを失いつつあるような思いにもなる。

どの子どもも、「わかった」「できた」「算数っておもしろいな」といえるような算数の授業を検討しなければ、基礎学力定着とはいえない。

<参考文献>

岐阜県教育委員会 2008 「岐阜県教育ビジョン」

文部科学省 2009 「習熟度別少人数指導の低学力層に対する学習意欲や学力への効果
習熟度別少人数指導の低学力層に対する学習意欲や学力への効果」

岐阜県教育委員会 2011 「基礎学力定着サポートプラン
～教育におけるセーフティネットの創造～」

佐伯 胖 1990 「考えることの教育」 国土社